

氏名(本籍)	よし おか きよ み 吉岡聖美(香川県)
学位の種類	博士(デザイン学)
学位記番号	博甲第5806号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	ホスピタルアートとしての絵画の印象評価に関する研究 - 視覚的造形要素の分析を中心に -

主査	筑波大学教授	博士(芸術学)	齊藤泰嘉
副査	筑波大学教授	博士(デザイン学)	蓮見孝
副査	筑波大学教授		穂積毅重
副査	筑波大学教授	博士(感性科学)	山中敏正

論文の内容の要旨

(目的)

本研究は病院に掲出される患者のためのアート作品(ホスピタルアート)に求められる条件を明らかにすべく、絵画の視覚的造形要素を中心に鑑賞者の印象評価を通してその特性を抽出し、病院空間におけるアートマネジメントの推進に資する知見を得ることを目的としている。

(対象と方法)

現状把握のために国内の病院での視察と海外の文献・資料による調査を行い、ホスピタルアートとしての絵画の適性について、印象評価実験および患者へのアンケート調査を実施している。

本論文の構成は、「序章」研究の目的・方法、「第1章」病院とアートの関わりについての現状調査、「第2章」病院のために制作されたホスピタルアートが患者に与える効果、「第3章」絵画の印象に関係する造形要素を確認するための実験サンプル絵画について、「第4章」横浜市立大学附属病院における絵画の印象と病院空間の印象評価、「第5章」絵画の造形要素と印象評価および眼球運動との関係、「第6章」患者がよい印象を感じる絵画の造形要素についての検証、「終章」本研究の総括、からなっている。

(結果)

「第1章」では病院の現状調査から、掲出される絵画の選択基準が明確ではない、患者に与える心理的影響が十分考慮されていない、などの実態を明らかにし、「第2章」ではホスピタリティを目指して制作し掲出した絵画が、患者の通院時、待合時の快適性向上に有効であることをアンケート調査によって立証している。絵画の印象を左右する造形要素を特定するための実験サンプルとしてモンドリアン、マレーヴィチ、ロスコーラの抽象画を選定した上で(「第3章」)、絵画そのものの印象と病院における調和性について調査し(「第4章」)、絵画の掲出状況の違いおよび異なる絵画間の印象評価の比較を行う中で(「第5章」)、ホスピタルアートに適する絵画の造形要素として適切な印象に関わるものを特定し、表現方法の特性についても確認した。そこから導き出された「患者によい印象を与える造形要素」を用いた絵画を自作して印象評価を行った(「第6章」)ところ、前記2つの調査、実験の結果の妥当性が裏付けられた。

(考察)

各章における調査、分析、実験の結果から、ホスピタルアートに適する絵画は、造形要素としては「陽気な」「さわやかな」「好きな」「軽い」「弛緩した」などの印象に関わるものを含み、表現方法としては垂直線・水平線を強調し、輪郭があいまいで線がなく、かつ造形要素の種類も限定されたものであることを確認した。また、眼球運動と印象評価の分析から、平均視線速度が速い絵画および注視点頻度が小さい絵画は患者に好印象を与えることも明らかになった。

審査の結果の要旨

ホスピタルアートは患者にとっての病院環境の快適さはもとより、医療効果にも関わる重要なものでありながら、その位置づけや適用に関する研究は殆ど進んでいない。本研究は地道な実態調査を踏まえて問題点を抽出し、ホスピタルアートに適する絵画を構成する造形要素について、独自の視点を定めて丁寧な実験を行った労作である。直線、輪郭線、色彩など、主要な造形要素の特性を把握した上で、それらを反映したモデル的絵画を著者自ら制作して検証実験を行ったことも評価に値する。本研究で明らかになったホスピタルアートに適する絵画の造形要素の諸特性に関する知見は、病院空間におけるアートマネジメントの指針構築の基礎資料として重要である。

論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。